

パタゴニアの野兎 ランズマン回想録

Le lièvre de Patagonie

Claude Lanzmann
Le lièvre de Patagonie



クロード・ランズマン 著
中原毅志 訳 高橋武智 解説

四六判 上製 上下巻 各 3200 円

版権仲介：フランス著作権事務所

フランスでベストセラーとなったのはもちろんのこと、英語、スペイン語、ドイツ語、ヘブライ語、イタリア語、ポルトガル語各国語に翻訳され、各紙で絶賛、大きな話題となった。待望の日本語版！

青年期のレジスタンスの経験、サルトルとの交友、ボーヴォワールとの同棲、映画『ショア』をはじめとする映画の撮影の裏話など多彩なエピソードと、深い哲学的考察のなかにユダヤ系フランス人としての自己を問い合わせ、その波乱に富んだ人生を赤裸々に語る。

☆登場する人物たち☆

ジャンポールサルトル、シモーヌ・ド・ボーヴォワール、フランツ・ファン、ジル・ドゥルーズ、ゲオルグ・ショーレム、ジャック・ル・ゴフ、マルシャル・ゲルー、ジャン・イボリット、ジャン・ラポルト、ジョルジュ・カンギレム、ガストン・バシュラール、シモーヌ・シニョレ、ロジェ・グルニエ、アブラハム・ポンバ、シモン・スレブニク、ミシェル・トゥルニエ、金日成 等々。

本文より一部抜粋

(訳 中原毅志)

* * *

一九四三年の新学期、なぜバカラロアに通った私を、父は本名でブレーズ=パスカル校の寄宿舎に入れたのだろう？ 父は私が学業を続けることを認めてくれたが——おかげで私は郵便局長にならずにすんだわけだが——、父にとって大学はあまりに危険すぎるようと思え、寄宿学校ならより安全だと考えたのだ。こうして私をクレルモン=フェランに送りだそうと決めた時、父はその息子が四ヵ月前からすでに共産主義青年団のメンバーになっていたことを知らなかった。私が父の MUR（統一レジスタンス運動）参加を知らなかったのと同じである。余儀なくされたこととはいえ、私たち家族は左寄りだった。もっとも私は、マルクスもエンゲルスもレーニンも読んだことがなかったのだが。確かに、学校で偽名で通すことは実際には非常に困難でほとんど不可能に近く、より大きな危険をはらんでいることは間違いかなかった。（2章より）

* * * * *

任務のうちの一つはきわめて危険なものだった。武器カバンの受取りである。拳銃や榴弾の入ったカバンをクレルモン=フェラン駅で受け取るのである。私はエレーヌ・オフヌンと一緒にこの任務を遂行した。〔……〕夕暮れ時、私たちは愛しあう届託ない学生を装って、優しくあるいは情熱的に身体を寄せあいながら駅に向かって歩いた。それぞれが小さなカバンを手にしていた。死ぬほど怖かった。駅で、私たちは指定されたホームの所定の場所に立ち、列車の到着を待った。足元に置かれたカバンは奇術師のような手際のよさでまったく同じ形と色のカバンに素早くすり替えられた。ただし、重さだけがけた違いに異なった。すべてが無言で瞬時のうちにおこなわれたために、武器を運んできた党の使者たちの顔を一つとして思い出すことができない。逆にエレーヌと私は、同じ駅の構内でゲシュタポによる電撃的な逮捕シーンを何度か目撃した。ソフト帽にコート姿の彼らは、狙いをつけた人物が列車から降りるや素早く拳銃を抜いて取り囲み、手錠をかけ、引き立てていった。恐ろしい光景だった。（2章）

* * * * *

一方、奴隸はその肉体、欲望、欲求つまりヘーゲルが呼ぶところの「肉体的必要」——ひどい訳だが直訳である——に執着し、栄誉への服従を選び、自分の眼に価値あるもののみを優先する。つまり自分の命、たとえおとしめられたとしても自分の生命である。『ショア』での忘れがたい人物の一人、フィリップ・ミュラーは、アウシュヴィッツ強制収容所で三年近くの期間、収容者で編成されたゾンダーコマンド〔特殊労務班、以下“特務班”〕の一員だった。非常に感動的な撮影の一日が終わった時、彼はこう言った。「私は生きたかった。何としても生きたかった。一分でも長く、一日でも多く、一月でも余分に。わかりますか？ 生きて……ですよ」。もちろん、わかる！ フィリップ・ミュラーと苦難を分かちあったその他の特務班のメンバーは、みな立派な人々であり、英雄そして殉教者、自分と同じ民族の墓

掘り人、そのすべてであった。 (2章より)

* * * *

ときの国防相イツハク・ラビンが一九八七年、『ショア』を見たあと、「独立」戦争の映画を作れないかと私に尋ねた。私は数日考えたのち、「できない」と答えた。この戦争に関してはふたとおりの物語がある。イスラエルの物語とアラブの物語である。ここで問題になるのは、どれが真実かではない。どちらの物語ももう一方を無視して語ることはできず、両者の主張の正当性に同時に^{より}与することはできないということである。もっとも、くだらない映画を作れというのであれば話は別だし、事実、その後この同じテーマでそういう映画も作られた。私は代わりに、イスラエルのユダヤ人による力と暴力の獲得をテーマにした映画をラビンに提案した。(3章より)

* * * *

戦後四年たった頃、私はサルトルの『ユダヤ人問題に関する考察』に接し、まず『反ユダヤ主義者の肖像』を貪るように読んだ。まるでその一行一行を文字どおり再体験しているかのように、もっと正確に言うなら、一字一句を自分が生きているように感じたのである。しかしさらに読み進むうち、私はサルトルがユダヤ人の非本来性と呼ぶものの記述に出会う。そして、それは突然私自身の肖像に重なった。足の先から頭の天辺まで、そこに描かれているのは私自身だった。(5章)

* * *

サルトルが私の記事を読んで興味を示したとコーが教えてくれた。それからしばらく後に、私は彼に会うことができた。カフカに関する素晴らしい講演のあと、私が自己紹介すると、彼は「ああ、きみがランズマンか!」と言い、タン・モデルヌ誌の編集会議に出ないかと誘ってくれた。会議はボナパルト通り四十二番地の五階にある小さな事務所でおこなわれていた。タバコの煙が立ちこめるその部屋からは、サン=ジェルマン=デ=プレの教会と広場を見おろすことができた。この集まりについてはあまりに多くが語られてきたので、ここでもくとも書くのはやめよう。ただ、サルトルがまったくあるいはほとんど無名の若者たちに寄せていた独特の信頼感を思う時、私は感動を覚えずにはいられない。(10章)

* * * *

新学年を迎え、私はソルボンヌ大学に登録した。いくつかの学士号証書を難なく用意し、ジャン・ヴァールや、理想的な人間味を体現していたマルシャル・ゲルー、とびきりのブルゴーニュアクセントのガストン・バシュラール、ジョルジュ・カンギレム、そして高等教育の論文指導を引き受けてくれたジャン・ラポルトらの哲学の講義を渡り歩いた。すでに述べたとおり、私は論文のテーマにライプニッツとその^{モナド}単子論を選んでいた。より正確に言うと、

この偉大な知性の哲学のなかの「可能性と非共可能性」である。これは今でもなお私の思考に光をもたらし、その現代性で私を驚かせる。私にドイツのフランス占領区にあるチュービンゲン大学へ行くことを決心させたのは、ミシェル・トゥルニエだった。(10章)

* * * * *

『なぜイスラエルか』は一九七三年十月七日、初めてニューヨーク映画祭で上映された。上映の朝、西四十四丁目のアルゴンキン・ホテルの浴室で髪を剃っていると、叫び声があがった。アンジェリカだった。一年後にエルサレムで結婚することになる女性である。彼女は小型テレビの画面に釘づけになっていた。そこには、エジプト軍がスエズ運河を渡って、バーレブ・ラインの掩蔽壕を破壊してゆく場面が映しだされていた。その日の上映は、特別な重苦しい雰囲気のなかでおこなわれた。映画のあの記者会見で、アメリカ人の女性ジャーナリスト——あるいはユダヤ人だったかもしれない——が尋ねた。「ところでムッシュ、あなたの祖国はどこですか？ フランス？ それともイスラエル？」私は一瞬もおかずに、激しい口調で答えた。それこそがあるいはここで述べた謎に光を当ててくれるかもしれないのだが……。「マダム、私の祖国、それは私の映画です」(11章)

* * * * *

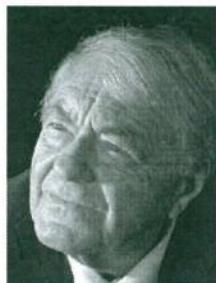
パリを発って以来、女性に触れていなかった。その朝、ピョンヤンはとても暑かった。汗の玉が上唇を濡らして、彼女の口はいっそう官能的になり、顔といい身体といい、彼女の全身から抗いがたい性的魅力が発散していた。……散歩に誘った相手の十歩先ないしは後ろを歩くことに私はもう我慢できなかった。彼女の近くを歩き、彼女に話しかけることで……こちらの言うことを相手が理解できないにしてもだ……(13章)

* * * * *

シュトゥットガルトに隣接するルートヴィヒスブルクにある中央戦争犯人追跡調査局で、アーダルベルト・リュッケルル局長と向きあつた時、私は胸躍る思いだった。中央調査局はナチスの戦争犯人および人道に対する犯罪者の特定、発見、逮捕、訴追を任務とするドイツ連邦共和国政府の組織である。礼儀正しく博学のこの人物との面会の約束は、エルサレムを発つ前に取りつけておき、この企画に必要不可欠と思われる人物百五十人分の名前のリストを持参した。いずれも関係資料から拾った名前である。法的義務は一切ないにもかかわらず協力を約束してくれたリュッケルルと彼のアシスタントは、私が探している人物の数を知って眼を丸くした。彼らがまず言ったのは、これらの人物の多くはすでに死んでいるか、跡形もなく行方をくらましており、自分たちの組織が関わった人物の住所——それも古いものだ——を特定するには時間が必要だということだった。(19章)

* * * *

聴衆に向かって、私はこの映画を撮らなければならぬと信じる理由を述べ、これまでに知ることのできたすべてを話し、現在までの進捗状況を説明した。私の説明のあと質疑応答が始まるのだが、訪問先のどこでも一様に同じ反応が返ってきた。異口同音に発せられた質問はこうだ。拝聴しました、では実際問題として、「ミスター・ランズマン、あなたのメッセージは何ですか?」私は茫然として立ちつくす。こんな質問に答えることはできなかつたし、今だつてできない。『ショア』のメッセージが何なのか私にはわからない。こんな問題の立て方をしたことはなかつたからだ。もし「私のメッセージは“二度とくり返してはならない!』ということです」とか、「お互いを愛しなさい」とか答えていたら、彼らは財布のひもを緩めたかもしれない。だが私はへぼで情けない資金調達係だった。だから、『ショア』の予算には、アメリカドルは一ドルとして入らなかつたのである。(19章)



© Éditions Gallimard

クロード・ランズマン Claude Lanzmann

作家、映画監督、『現代』編集長

レジスタンス勲章、レジオンドヌール三等勲章、国家功労賞グラントフィシエ章を受章。エルサレム・ヘブライ大学およびアムステルダム大学名誉博士。

1925年 パリに生まれる。

1943年 対独レジスタンス運動を組織

1947年 ベルリン封鎖の時代、ベルリン自由大学で講師をつとめる

1952年 サルトル、ボーヴォワールと出会う。

イスラエルに初めて出かける

1973年 ホロコーストを扱った9時間半にも及ぶ映画『ショア』の製作にとりかかる

1985年 『ショア』公開

フィルモグラフィ

『なぜイスラエルか』1973年
『ショア』1985年
『ツアハル』1994年
『通りすぎる生者』1997年
『ソビブル、一九四三年十月十四日午後四時』2001年
『カルスキ・レポート』2010年
『不正義の果て』2013年

訳者略歴：

中原毅志

長野県生まれ。翻訳家。ルーヴアン・カトリック大学卒業。訳書に『カンボジア運命の門』(F・ビゾ著、講談社)、『プレヒトの愛人』(J=P・アメット著、小学館)、『U.V』(S・ジョンクール著、集英社)、『食卓の不都合な真実』(G=E・セラリーニ著、明石書店)、『トランク』(短編集、ルイ・ヴィトン&ガリマール共同出版)他。著書に『悠久のソナタ』(TBS ブリタニカ)。

解説者略歴：

高橋武智

フランス文学者。翻訳家。わだつみ会理事長。

訳書にクロード・ランズマン『ショアー』(水声社)、ランズマンの映画の翻訳・監修を多く手掛ける。